

巻頭言



情報倫理学の提唱

高根 宏 士†



本学会も設立以来 27 年、会員も順調に増え今や 2 万 5 千名を超える大学会となった。これは情報処理という世界の発展と軌を一にしているためであると思う。

情報処理は当初コンピュータハードウェアを有効に使うために登場してきた。ハードウェアの制約の中でいかに効率のよいプログラムを作るかが大きな課題であった。この時代はスタンドアロン、バッチの世界である。機械に合わせて人間があった。その後オンラインシステム、TSS が登場し、時間的、空間的な意味では多少人間の立場を考慮できるようになってきた。現在はハードウェアの進歩により、メモリや性能の制約は大幅に緩やかになり、まともにマンマシンインタフェースが考慮されるようになってきた。その例がパソコンやワークステーションに代表される。また AI が大きくクローズアップされている。いずれにせよ当初機械に制約されていた世界から人間が自由に発想・行動できる世界へと情報処理は発展してきた。

しかしいくつかの問題が発生している。一つはコンピュータ犯罪である。コンピュータシステムを自己の利益または趣味のために、他への迷惑も顧みず、操作しようとする行為である。この件数は年々増加している。西独から日本のコンピュータへアクセスがあったことも記憶に新しい。将来軍事システムへのアクセスがされた場合、人類にとって大きな脅威となる。

次に情報処理システムの発展により、経済活動の中で情報のもつ役割が非常に大きくなっていることである。企業活動のほとんど、特に金融は世界の経済情報に連動している。たとえば通貨の交換レートにしても米国の FRB 議長や日銀総裁の発言が瞬時に世界を駆け巡り、各国のディーラがそれに反応し、その動きがまた動きを呼び、一つの方向に加速される。経済活動をより効率的にするために情報の活用は当然である。しかし実質の生産活動を伴わない金の動きが実物経済

の 100 倍もの大きさに動いていることには大きな危険を感じる。経済活動がゲーム化されている。意識するとしないうに問わず胴元に世界全体が制御されるようになってきている。このような意味で情報を使うと経済活動だけでなく、すべてにおいて少数の人間により世界は制御される可能性がある。

次に情報による情報の生産である。情報処理の発展により我々は情報と情報を組み合わせることにより、簡単に新しい情報をつくるのが可能となってきた。その中には役に立つもの、立たないもの、有害なものなどがあるが、大量の情報の生産により、それらに対して価値判断する力が追いつかない事態が生じつつある。またそれぞれの情報がそれぞれの島をつくり、他との間での共通の理解ができなくなってきた。これまでは地域的、人種的垣根があったが、これからは情報的垣根がでてくる。しかもその情報は増大の一途をたどっている。我々はこれまで情報により、物質とエネルギーを制御する力を大きくしてきたが、いまや情報を制御できなくなる恐れが発生しつつある。

コンピュータ犯罪、経済活動における情報の影響、情報の洪水について述べた。現在情報は我々の世界で強大な力をもっている。今後この力はますます大きくなっていく。我々は原子力発電所の安全性や物理的、生物的な意味での環境アセスメントに大きな関心をもっている。しかしそれと同程度以上に我々は情報の安全性、環境アセスメントに関心を向けなければならない。その基本には人間存在の原点からみた情報の価値に対する判断がなければならない。情報が力をもてばもつほど、我々はそれに対して倫理的観点からの対応が必要になる。情報を効率よく活用するための情報処理の研究と同時に情報を何のために使うのかを探究する情報倫理学が必要であると考え。これは情報処理に携わるもの、研究者、開発者、事業家、ユーザ、政治家、マスコミすべてが意識しなければならないことである。

(昭和 62 年 8 月 12 日)

† 本会理事 三菱電機東部コンピュータシステム(株)